

る因果の思想」(仏教思想研究会編『仏教思想三 因果』平楽寺書店、一九七八、所収)によってあとづけられる。

黒崎宏は、ウイトゲンシュタインの視点を通じて、龍樹の縁起思想に基づく仏教思想を反実在論として示し、世界のあらゆる物事は言語的存在だと述べた(黒崎宏『理性の限界内の『般若心経』——ウイトゲンシュタインの視点から』春秋社、二〇〇七、等)。

われわれが住んでいる世界は、物の世界でも事の世界でもなく、「言語ゲームの世界」であり「意味の世界」である。われわれが普通持つような実在論的世界観を拒否したのだ。そして、縁起の世界は意味的な関係をもつものだとし、「縁起の世界」意味のネットワークの世界「言語ゲームの世界」と黒崎は論じたのである。だが、端的に言って、言語という意味論によって存在論が尽くされるということには疑問が残るし、もし言語によって存在論が尽くされるのだとするなら、あらゆる存在物はわれわれ人間の所産という事になりはしないだろうか。すると結局、黒崎が作り上げた世界観(言語ゲーム一元論)は、現実のものごとは、われわれが作り出したものに過ぎず本当のことではない、という空観に強く偏って、ニヒリズムに陥ってしまうのだ。

この弱点を、デイヴィドソンは回避することができる。というのも、彼が、言語的な世界観を重く受け止めながらも、単純な言語的な一元論に立たないからである。彼の議論の特色は、論文「概念枠という考えそのものについて」(デイヴィドソン、野本和幸・植木哲也・金子洋之・高橋要訳『真理と解釈』勁草

書房、一九九一、所収)において論じられる、概念枠批判の議論にみることができる。彼は概念枠と内容という二元論を批判し、われわれの世界観が言語の影響を強く受けていることを肯定する。しかし、デイヴィドソンの世界観は、単純な言語的な一元論ではない。われわれが言語的な生活を営みつつも言語に飲み込まれることなく、われわれの信念や文は現実の出来事によって真偽が判定される部分を残しているのである。われわれは言語的な世界にあることを自覚しつつも常に現実を参照する余地を残しているのだ。

このようなデイヴィドソンの見解を見ていくと次のことが明らかになる。われわれは世界を言語的に理解しているのだ、と空観の如く実在主義を拒否しながらも、われわれの言語的な世界観を肯定しつつ現実の世界が関わる余地を残している。こうした理解の仕方は、三諦説において、仮諦を観ずる仮観に相当するといえるだろう。

法華経の成立過程についての一試論

西 康友

梵文法華経(以下、「SP」とする)。SPの底本は、H. Kern and B. Nanjio (ed.): *Saddharmapundarīka, Bibliotheca Buddhica* X, St. Petersburg, 1908-12を用いた)について、いくつかの用語(saddharmapundarīka-「梵文法華経の経典の名称」, dharmaparyāya-「教説」, sūnya-「空」, sūnyatā-「空性」, 空そのもの, anutpatikadharmakṣānti-「何も)生じることがないという真理を認める(智慧)」)に着

目し、SPの成立過程を論じたものである。

法華経成立研究については、布施浩岳『法華経成立史』以来、あらゆる研究者の論述があるが、未だにその結論に至っていないと考えられる。そこで、SP成立過程を解明すると考えられる手がかりを提示してみたい。

まず、SPに現れる *śūnya*, *śūnyatā*, *anupatīkadharmakṣānti* の用語について、着目し、検証してみたところ、以下のようになる。SPに見られる *śūnya*, *śūnyatā* の用語が現れるすべての箇所に着目すると、原始仏教における空(第3章第12偈で初出し、第10章の SP 234.10 まで現れる)、梵文八千頌般若経(以下では「ASP」という)の空(SP 第5章で現れるが『妙法蓮華経』には相当箇所が見当たらず、『妙法蓮華経』と SP にあるのは、第13章後半(SP 277.11)で初出し、第13章第19偈まで現われ、これ以降に現れない)にはつきりと SP が分類できるのである。また、ASP に特有な空の概念のひとつである *anupatīkadharmakṣānti* に着目すると、『妙法蓮華経』に相当箇所がある SP では、第11章(SP 266.1)に初出し、第23章(SP 437.1)まで現われている。したがって SP は歴史的阶段を経て編纂されたといえよう。

また、*saddharmapūṇḍarīka*, *dharmaparyāya* の用例を検証するに、*saddharmapūṇḍarīka* が引用されている章には、すでに SP の存在が認められていることになるから、これが現れず、*saddharmapūṇḍarīka* を意味しない *dharmaparyāya* 以外で、*dharmaparyāya* が現れていないのが、より古い SP となる。その SP は、第2章と第5章である。

以上のことから、SPは歴史的阶段を経て編纂され、その中でも最も古い章は、第2章 *Upāyakaṅsalya* (『妙法蓮華経方便品第二』に相当する)と考えられるのである。

バーヴィヴェーカによる自性 (*svabhāva*) 批判

兼子 直也

本稿の目的は、バーヴィヴェーカ著『知恵の灯火』(*Prajñā-pradīpa*, [D]) 第十五章の論述を中心に検討して、空性証明において否定される諸事物の自性が、彼にとって何であったのかを説明することである。

従来、ナーガールジュナの主要な論敵は説一切有部と考えられており、自性は有部の重要な概念の一つである。有部の教理では、世俗の事物を構成する要素はダルマという不可分な真実在であり、各ダルマに自性が規定されている。そして、自性はダルマそれ自体と考えられている。しかし、バーヴィヴェーカは、後述するように自性を「もの」と「性質」という形で理解することによって、それに異なった意味を付与するとともに、自性を、中観派の二諦説の枠組みで論じた。有部の自性の概念は彼によって批判的に検討され、大幅に再解釈されたと考えられる。

バーヴィヴェーカの自性理解には、二諦説と関連して二段階があると想定される。その二段階とは、最高の真実に適う本来的な自性と、言説上の自性である。その理由は、『中論』第十五章では、自性という概念自体を説明した第一、二偈と、他性との関係で自性を説明した第三、四偈との間に微妙な意味内容の